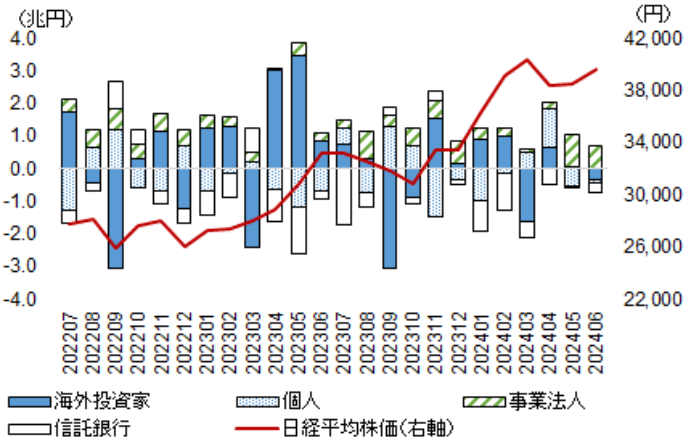
研究員の眼

投資部門別売買動向(24年6月)
～海外投資家は売り越しも、最終週は先物中心に買い越し～

金融研究部 研究員　森下　千鶴
(03)3512-1855　mchizuru@nli-research.co.jp

6月の日経平均株価は続伸した。上旬は3月期本決算企業の決算発表終了による材料難や、日米欧の金融政策決定会合の結果待ちで様子見の姿勢が強く、5月末水準の3万8,500円台後半で推移した。その後、10日には1ドル157円台まで円安が進行したことを好感し、11日に3万9,134円まで上昇した。しかし、欧州の政局不安を受け、日経平均株価は翌12日には3万9,000円を割り、17日には3万8,102円まで下落した。下旬は、米国のハイテク株の上昇や、1ドル160円台まで円安が進行したことが好感され、日経平均株価は26日に3万9,667円まで上昇し、月末は3万9,583円で終えた。このように日経平均株価が推移する中、事業法人が買い越す一方で、海外投資家、信託銀行、個人が売り越した。

図表1　主な投資部門別売買動向と日経平均株価の推移



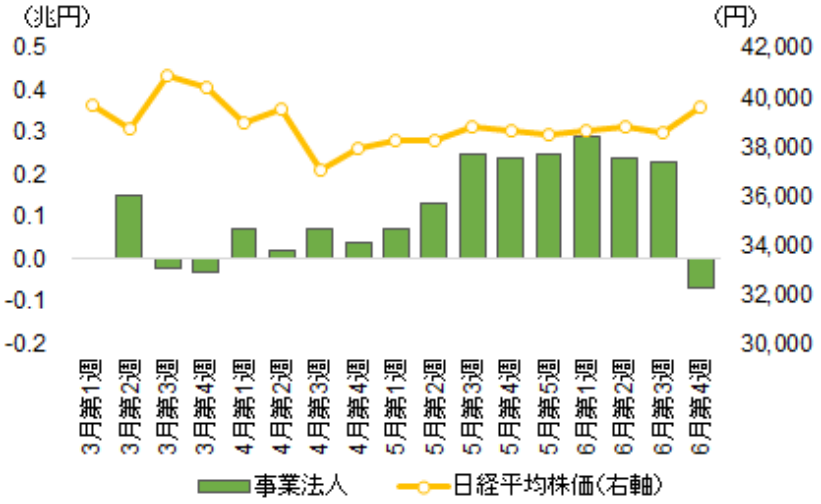
単位:億円（億円未満切り捨て）		海外投資家	個人	証券会社	投資信託	事業法人	生保・損保	都銀・地銀等	信託銀行	日経平均株価(円)
月次	202404	6,600	11,790	345	3,662	2,131	25	147	-5,092	38,405.66
	202405	803	-5,534	-291	816	9,665	-1,312	4,189	-315	38,487.90
	202406	-3,213	-1,116	-172	-951	6,932	-1,033	-199	-3,265	39,583.08

(注)現物は東証・名証の二市場、先物は日経225先物、日経225mini、TOPIX先物、ミニTOPIX先物、JPX日経400先物の合計
(資料)ニッセイ基礎研DBから作成

 Copyright ©2024 NLI Research Institute All rights reserved

2024年６月（６月３日～28日）の投資部門別の売買動向をみると、事業法人は現物と先物の合計で6,932億円の買い越しと、最大の買い越し部門であった。2024年１月から６月までの自社株買い設定金額（ＴＯＰＩＸ構成銘柄）は既に9.3兆円に達している。特に５月の設定金額は5.8兆円と過去最高を記録しており、自社株買いが中心である事業法人は、２カ月連続で最大の買い越し部門となった。

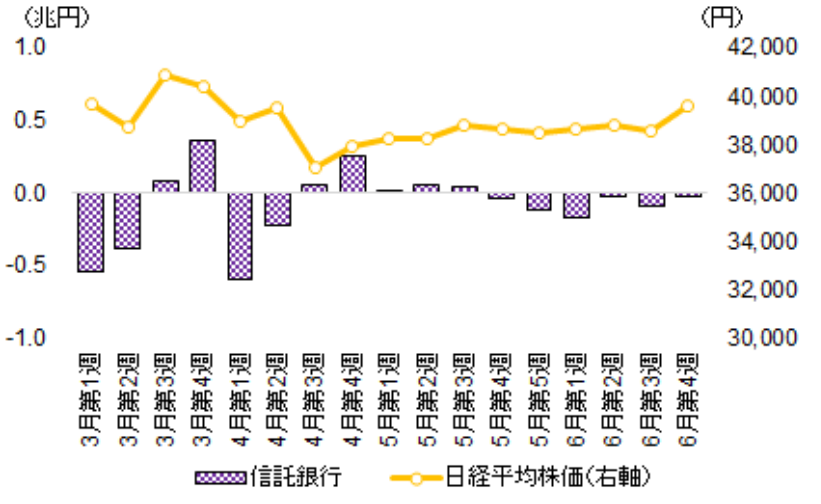
図表2　事業法人は37カ月連続買い越し



(注)事業法人の現物と先物の合計、週次
(資料)ニッセイ基礎研DBから作成

一方で、信託銀行は現物と先物の合計で６月に3,265億円の売り越しと、最大の売り越し部門であった。７か月連続の売り越しであり、６月は週ごとに見ても、小幅ではあるが全週で売りが優勢だった。

図表3　信託銀行は7カ月連続の売り越し

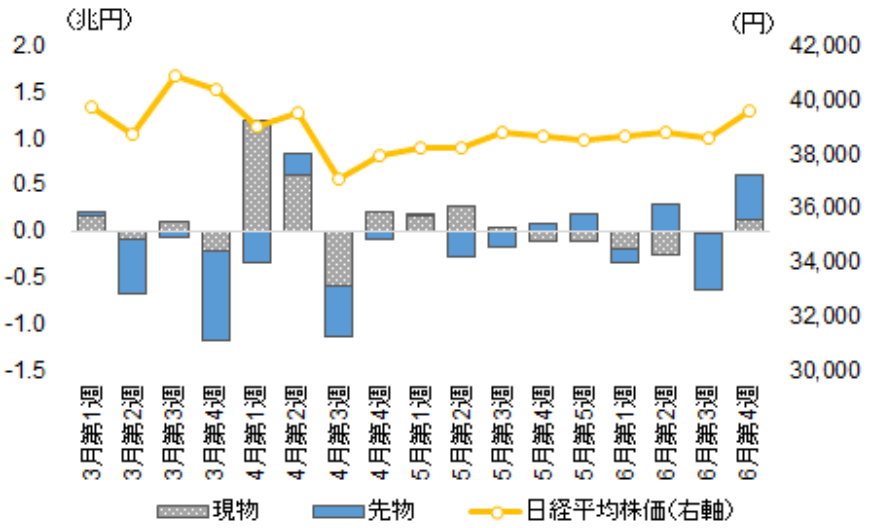


(注)信託銀行の現物と先物の合計、週次
(資料)ニッセイ基礎研DBから作成

 Copyright ©2024 NLI Research Institute All rights reserved

また、６月は海外投資家も現物と先物の合計で６月に 3,213 億円の売り越しとなった。ただし、週ごとに見ると、６月第４週（６月 24～28 日）は現物と先物の合計で 5,960 億円の買い越しであった。同期間に日経平均株価は約 980 円上昇しており、買いの主体が注目されていたが、海外投資家が先物を中心に買っていたようである。日経平均株価は７月に入っても上昇し、７月５日時点で４万 912 円と、直近２週間で約 2,100 円上昇した。7 月第１週も海外投資家の買いが継続していると推測される。

図表4　海外投資家は売り越しも、最終週は先物中心に買い越し



(注)海外投資家の現物と先物の合計、週次
(資料)ニッセイ基礎研 DB から作成

以上

お願い）本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。